

## 学生時代に得た宝もの

看護福祉学部  
看護学科

准教授 竹生 礼子



私はあまり優秀な看護学生ではありませんでしたが、仲間と大学生活を大変楽しみました。高校生のころは、学びたいものがたくさんあり過ぎて進路選択に困っていました。結局、当時では国立大学として唯一の看護学部があった千葉大学に進学したいと急に思いたち、運よく入学することができました。1・2年のころは大学受験が終わった解放感で、サークル活動の方にかなり力を入れてしまいました。絵を描くのが好きで美



1年生のとき。西千葉キャンパス「絵画同好会」のサークル小屋の前で。さまざまな学部の学生が混在していた。前列右から2番目の灰色のベストスーツを着ているのが私。

大にあこがれていたこともあり、「絵画同好会」に入りました。しかし、絵画同好会はハイキングや旅行・スキーなど遊んでばかりで絵を描かない同好会でした。私にとって、このサークルは学生生活の精神的サポートしてくれる大切なものとなりました。看護学部の他に、工学部や園芸学部、教育学部、薬学部、理学部など違う学部の学生が混在していて、皆に会っていると

専門の難しい勉強や実習から離れてほっとすることもできるし、逆にお互いが取り組んでいる分野(学問)を尊重する雰囲気がありました。自分が学んでいることを他学部の学生に伝えることで、自身の分野の専門性に気づき誇りに感じられました。このサークルメンバーとは今年に一回くらい同期会を開いて会っています。

さて、3年生になって、専門的学習が進むにつれ、ようやく私も看護を学ぶことに力を入れるようになりました。実習で実際に患者さんに出会ったことにより、患者さんのケアのために「もっと勉強しなければ」と真剣になったのです。看護のおも



4年生のとき。総務省統計局前。クラスの半分が写っている。左端に中島紀恵子先生、2列目の右端中腰になっているのが私。

しろさ、奥深さを感じたのもそのころです。もっと早くからしっかり勉強すればよかった、とひとしきり後悔。

写真は4年生のときに2つのグループに分かれて総務省統計局の見学に行った時のものです。本学初代看護福祉学部長の中島紀恵子先生と一緒に写っています(約30年前)。大学では、机上の授業だけでなくさまざまな経験や見学をさせていただいた記憶があります。このクラスは結束力があり今もずっと交流が続いています。2年に一度クラス会を開いています。それぞれ皆かなりりっぱな人になっていますが、関係なく学生時代の○○ちゃんにもどれる不思議な感覚の会です。

学生時代に出会った違う学問や職業分野のサークル仲間、同じ領域で頑張っているクラスメイトはどちらも、私の人生の宝ものとなっています。

# 私の学生時代

今、本学の教壇に立たれている先生たちは、学生時代をどのように過ごしていたのでしょうか。今回は竹生准教授と西澤教授のお二人に、当時の様子を語っていただきました。

## 私の学生時代

心理科学部  
言語聴覚療法学科

教授 西澤 典子



学生時代があまり楽しくなかった、そう感じるのには勉強ができなかったから。

まじめな努力家だったから、小学校から高校まで、成績はとてよかったです。しかし、どうがんばっても点数がとれない科目がありました。それは、地理学と数学の図形問題です。いまでもテレビのクイズで、輪郭を示して「これは何県?」という問題がすらすらわかる人の気が知れません。教科だけでなく、たとえばカーナビというものは、私には全く役に立たないんです。画面から路上に目を移したとたん、地図の記憶が消えているのですから。

これはきっと、私の脳の機能に欠陥があるのでしょう。問題を解決する能力(知能)には、二つの側

面があることがわかります。視覚を通して入力された情報による能力と、聴覚を介して入力された情報による能力です。この視覚的な情報を利用する能力が私は著しく低い、そう思っています。

そういう人間がたまたま医学部に入ってしまうと、どうなるか。最初の躰きは「解剖学」ですね。膨大な、(私には何の意味もない)形の情報を片っ端から頭に入れていくことが、どうしても出来ませんでした。当時組織学の助教授でいらした阿部和厚本学名誉教授が、血球の分類が全然出来ない私を叱ること叱ること。一生懸命勉強してたんですよ、阿部先生。でも、教科書の図版をみて、顕微鏡に目を移したとたん、記憶が飛んでしまう。

解剖で落伍し、病理で落伍し、基礎医学が全くわからないまま臨床に進んでも、学問はおもしろいはずはありません。私はろくろく出席もせずに、下宿で趣味に没頭していました。(だからといって、学生諸君への出席確認が甘いと言うことは全然ないので

気をつけてくださいね。)

私の趣味は音楽のレコードを聴くことでした。「ドイツリート」というジャンルです。ピアノ一台、ソリスト一人。哲学的な詩をテキストとする歌曲を延々と歌う、大変暗い音楽です。今思い出してもため息が出ますね。ボーイフレンドもない女の子が下宿にこもって毎日レコードを聴き続ける図。

結局医学がわからないまま卒業してしまい、将来に希望も持てなかった私は考えたわけです。「ダメならダメで、好きなことをやろう。」好きなこと→歌を聴くこと→声のお医者さん。という短絡で、耳鼻咽喉科を選択してしまった私は、その後、師の恩に恵まれ、学問の楽しさを知り、言語聴覚医学の専門家として、人を教える立場になりました。

このような学生時代を送ってきた私の、学生諸君へのメッセージ。「迷ったときは好きなことをやろう。10年たてば世の中は変わる。きっとあなたが必要とされる時代になりますよ。」